タイ国内日本人家庭ホームスティプログラムは関わった人たちにどんな意義があったか－学習者・教師・日本人協力者３者の調査報告－

深澤伸子

1. はじめに

近年日本人協力者を学習リソースとした学習活動が増加してきている。ホームスティプログラムはそのような学習活動の一つであるが、先行研究では学習者側の学習効果に焦点が当てられることが多く、日本人協力者にとっての意義、また教師にどっての意義を同時に調査したものは無い。そこで2003年に実施されたラーチャパット・ナコンシータマラート(以下R.N)の２年生がバンコク在住日本人家庭にホームスティした活動において、それに関わった学生、教師、日本人協力者、それぞれにとってこの活動がどんな意義を持ったのか調査した。調査はホームスティ実施後１年半経った2004年10月から12月にかけて行ったものである。

2. ホームスティ概要

2.1 アドバイサー及びコーディネーターの役割

この活動に筆者は学外からアドバイサーとして参加。コーディネーター及び受け入れ家庭探し、過去の事例及び筆者の経験からホームスティ活動についてアドバイスした。

コーディネーターは受け入れ家庭の中の一人。受け入れ家庭探しから参加し、受け入れ家庭と学校側との連絡、さらに受け入れ家庭側の要望のとりまとめと問題処理にあたった。

2.2 ホームスティと前後の活動日程

2003年	5月下旬	バンコクで打ち合わせ（教師、コーディネーター、アドバイサー）
	6月	受け入れ家庭を探す
	6月29日	バンコクで受け入れ家庭との話し合い（学生以外の関係者全員）
	7月26日～28日	ホームスティ実施
	8月16日	バンコクで受け入れ家庭との反省会（学生以外の関係者全員）
2004年	2月15日	日本語祭り　日本人訪問（受け入れ家庭２名参加）
	8月9日	「ようこそﾅｺﾝｼｰﾀﾏﾗｰﾄへ」日本人招待（受け入れ家庭１６名参加）

3. 調査対象と調査方法

時期：2004年10月～12月

対象：学生18名中調査時に在学していた16名、プログラム担当日本人教師２名、日本人協力者

は受け入れ９家族のうち調査時にタイに滞在していた７家族７名。

方法：教師、日本人協力者はインタビュー、学生はタイ語によるアンケート。

4. 教師インタビュー調査結果

4.1 ホームスティプログラム実施の動機

教師はホームスティをやってみようと思った理由について次のように語っている。

・主専攻になって初めての学生だったが遅刻欠席が非常に多くびっくりした。数人の学生を除き意欲が感じられない。学習以外の面でも意欲が感じられない。前年度の副専攻の学生に比べても日本語力がずっと劣る。学習動機も弱かったと思うが、むしろ最初の動機さえしぼんでいくようであった。

そういう学生にとって、ホームスティによって日本を身近に感じることが学習意欲の喚起になるのではないか、と考えたというのである。

4.2 教師の目から見た学生の姿

では期待した学習意欲はホームスティをやることで高まったのだろうか。

《ホームスティ前》

・ホームスティをやることを伝えて、日記を書く会話の練習をするといった過程から遅刻欠席がなくなった。そんなにすぐ学生が変わると思わなかったので驚いた。

《ホームスティ後》

・すごくよく話すようになったといった、学習面で顕著な変化はなかった。しかしホームスティが終わって、もっと話したり聞いたりしたかったのにできなかったという感想がほとんど全員。もっと日本語がわかるようになりたいという機運がクラス全体に生まれた。すぐに学習面で変化はなかったが、学習の熱心さはホームスティの後全く違っていた。

そこで教師は次の目標を日本語能力検定４級受験にしようと考えた。この受験授業は課外授業として行われたが、

・全然休まない。すごくがんばった。実際は受からない学生が多かったのだがこんなに集中して勉強したことはなかった。それは自信になったのではないか。またこれを機会に日本語がわかるようになっていったのではないだろうか。

ホームスティを契機に、教師が期待したように学習意欲が喚起されたことがわかる。しかしその後、予想外の変化を目にする。

・１月（2004 年）の日本語祭りに日本人が２人来てくれることになった。寮にも帰らず夜遅くまで準備したり、休みの日にも準備。そのような自主性は初めて見た。皆でそろって何かしようという雰囲気もその時初めて感じた。

それまでも日本語祭りはやっていたが、今までとは全く違う取り組みの姿勢だったというのであ

る。それがクラス全体の雰囲気になっているのを見て、教師はこの時初めて「クラスとしての一体感を感じた」と言う。この一体感は教師と学生との一体感でもあっただろう。

4.3 教師の思い

1月の日本語祭りで予想外の学習者の自主性を見、ほかの学科の教師達が授業を中止してまで見に来るほどの盛況を前に教師は、

・ほかの学科の人にも日本語学科として認知され、やっと市民権を得たと感慨深かった。

日本語学科が名実ともに主専攻として認められたと実感したのである。主専攻になった年、

・せっかく主専攻になったのにやる気のない学生を前に暗澹とした気持ち

・ナコンシー（ﾅｺﾝｼｰﾀﾏﾗｰﾄの通称）は田舎、こんな田舎からは早く脱出したい

と考えていたのが現在では、

・生徒はかわいい　　・ナコンシーほどいいところはない

と、晴れ晴れと言うに至るのである。

5. 学生調査結果

学生にはアンケートを行った。アンケートは①ホームスティをやる前の1年次と現在の自分の比較１６項目(選択)。②ホームスティの感想３項目（自由記述）である。①の内容は遅刻欠席数の増減、学習時間などの生活比較と、意欲などの内面的な意識比較である。調査は質問回答ともにタイ語で行なった。

5.1 現在の自分をどう思うか

教師のインタビューで学生がホームスティ後に変化していった様子が報告されたが、学習者自身はどうとらえているのだろうか。アンケート①の中の意識比較では、

	とても減った	減った	同じ	少し増えた	増えた	とても増えた
1.日本語学習の意欲		1		1	10	3
2.日本語に対する自信				4	8	4
3.学校生活の楽しさ				2	11	4
4.友だちに対する信頼感や仲間意識	1			3	8	3
5.先生に対する信頼感			1		8	7
6.積極性				1	9	6
7.自主性				2	11	3

ほとんどの学生が全ての項目で1年次より「増加」と評価している。それは教師の目から見た学生の姿と一致する。生活比較でも全体に勤勉さが増している傾向が見られた。それでは現在のこの評価にホームスティ活動は関連があったのだろうか。

5.2 ホームスティの感想

ホームスティについて「何が心に残っているか」「その後の変化」「ホームスティ家族に伝えた

いこと」、この３つの質問に自由記述で答えてもらった。全体をまとめると、「日本人は時間を守る」「段取りをする」、「話し方」や「習慣がわかるようになった」など、日本人や日本文化の理解が進み、関心が高まったことがわかる。日本語についても、「スムースに話せるようになった」「日本人から教えてもらった言葉は忘れない」など、生の接触によって学習効果もあったことがわかる。また「やる気」が生まれたことを示す記述も多く見られた。しかし最も多いのが、「まるで家族のよう」に「親切に面倒をみてくれたこと」に対する感銘であり、「仲良くしてくれた」ことや「やさしさ」が今も心に残ると全員が答えている。このように日本人への親近感や信頼感が高まったことは、日本人に対する情意の垣根を低くし、日本人と話すのが「怖くなくなり」、さらにもっと接触を求める「勇気が出た」というのである。しかし、日本人との関係だけでなく、この活動を皆で体験することによって「友人と前より親しくなった」という答えも複数あった。このような効果もまた重要である。そして、

・この経験は私にとって新しい環境に入ることを可能にすると思う。

・ホームスティでは間違えても叱られることはなかった。ただ勇気をもってやりさえすればいいと知った。そして前より自信を持つことができた。

と、自分自身にも「自信が持て」「意欲的になった」と報告している。

以上、自由記述の回答は 4.1 の自己評価に通じるものである。また「ホームスティ家族に伝えたいこと」にも多くの記述があり、「この活動によって私の学生生活は完璧なものになった」など、１年半経っても心に強く残る印象深い体験であったことを感じさせる記述が多く、ホームスティが学習者にとって現在の状態への変化の大きな契機であったことは間違いないだろう。

6. 日本人協力者調査結果

6.1 海外駐在の環境

インタビューでいろいろ話を聞いているうちに、彼らの置かれた駐在員という環境の特殊性が浮かび上がって来る。駐在員の生活を「閉じられた社会」と感じ、「閉塞感」を感じる人は多い。また、この閉塞感は言語の問題からももたらされる。言葉ができないために「何をやるにも手助けが必要」と、生活はしているが自立していない感じがつきまとい、そんな中ではタイの生活に「いつもお客さんの感じ」と、実感が薄い。そういう環境にある人が、ホームスティ受け入れにどのような期待をもっていたのであろうか。

6.2 ホームスティ受け入れの理由

・ふつうのタイ人と関わりたかった

・タイの子供と触れあいたかった

・自分の子供にいろいろな体験をさせたい

・何かタイの役に立ちたい

・日本の事を知ってもらいたい

・日本語学習の役に立ちたい

といった理由を挙げているが、特に「タイ人と関わりたい」という理由を挙げた人が多い。駐在員の場合、日常の生活の中でのタイ人との接触はメイドや運転手さんなどとの接触に限られている人が多く、それもまた閉塞感をもつ一つの原因になっていると考えられる。

6.3 ホームスティ直後の感想

ホームスティ反省会でホームスティの感想を聞いた。

・無事終わってよかったという気持ち。別れの時に自分が泣いてしまってびっくりした。

・最後の日皆さんとお別れした時「あー、これからあの汽車で１４、５時間もかけて帰っていくのだな」と思うと涙が止まらなかった。

・一緒に寝泊まりするというのはすごいことだ。こんなに親近感が沸くとは思わなかった。

2 泊 3 日の滞在で思ったより親近感が生まれたことがわかる。

この時点で全員が来年も継続して参加を表明したが、ほかの学校やほかの地方ではなく、RN の学生を受け入れたいという回答がほとんどだった。この時日本人のほうから、みんなで学校を訪問したいという話が出た。そこにはＲＮへの強い思いと、同時に一緒にホームスティを行った日本人間の連帯感のようなものが見えた。

6.4 １年半後のインタビュー

それでは１年半後、日本人協力者はこのホームスティをどう受け止めていたのだろうか。

・自分の家に来た子が一番と思ったが、その愛着は時間とともに薄れて行く。

・確かに感動したが時間が経ち、今もすごく印象に残っているというわけではない。

というようにホームスティの記憶と感動自体は薄れてきている。では日本人協力者にとって、ホームスティプログラムの意味は時間とともに無くなって行ったのだろうか。

「あなたにとってホームスティプログラムはどんな意味があったと思うか」という質問に対し、むしろ終わってすぐにやった反省会では見られなかった様々な感想を聞くことができた。

・ホームスティは画期的なことだった。タイ人の知り合いはいなくはないが、家に泊まるというほどの知り合いはいない。だからそれ自体が自分の生活の中で画期的なこと。

・このホームスティではなるべく日本語で話してくださいと言われて、日本人であることが今回は特権なのだと感じた。タイに来て初めて自分が役に立ったと、大手を振って言える、そういう体験に初めて会った。

この人は日本でもホームスティの受け入れを何度かやったことがあるが、日本での受け入れとは「役に立つという実感」「日本人であることが利点になる」という点で違う、と答えている。

またホームスティから始まったＲ.Ｎの活動に参加することで、

・８月のナコンシー訪問に誘われてプーケットから自力で車を借りて行った。（中略）この旅

行は３年の滞在で一番の思い出。タイにいるということをすごく実感した。ホームスティの活動がなければ自分の力で旅行しようなんて思わなかった。

というように、ホームスティから広がった活動に参加する過程で、今住んでいるタイを強く実感する体験ができたというのだ。タイという「土地」の実感は次のコメントにも表れている。

・最初は南という地方のことも知らないし、なんのイメージももっていなかった（中略）そこに住んでいる人のことなど具体的なイメージは全くなかった。今、ナコンシーは身近。あそこにあの学生が住み、村山先生達が住んでいると思うとほかの旅行で行ったところとは別格。

またある人は学生の一人が目の病気で休学したと聞き、

・日本に帰ってからもタイ語の勉強を続けようと思う。文字で書いた手紙なら家族に読んでもらうことができる。日本に帰っても励ましたい。

と、印象が薄れたとは言いながら、ホームスティで学生を受け入れたことで、帰国後もタイ語学習を続けたいというほどのつながりを感じ、自分自身の新たな目標も持ったのである。

１年半後のインタビューでも７人全員が「また機会があったら受け入れたい」と答えているが、しかし地域はどこでもかまわないと答え、その点がホームスティ終了直後の感想と異なる。１年半経ち感動も前ほど強く残ってはないないが、風化はしていない。むしろ、個人への関心からタイへ、ほかの日本語学習者へと関心が広がっているように感じる。それは感動が感傷ではなく日本人協力者の中に体験として消化され、新たな体験を期待する経験として内在化したということではないだろうか。

7. まとめ

この調査でホームスティプログラムに関わった全ての人に、その立場それぞれにとって意義があったことがわかった。学生にとってホームスティは意欲を喚起し、自分に自信を持ち、自立できるようになる契機になった。教師にとっては学生の変化こそが大きな意味をもった。仕事のやりがいと誇り、それらは学習者の変化によってもたらされた。そして、日本人協力者にとっては日本人であることを生かす場、自分が置かれている枠組みから解放される可能性、住んでいる国を実感できる活動として意義があったといっていいだろう。

だが、ホームスティ活動をすれば全てこのような結果がでるわけではない。本稿ではこのホームスティプログラムの成功要因については詳しく述べないが、今回の実践では教師とコーディネーターとの間に交わされたメールだけでも３０通を超える。しかしそれだけの努力を払う価値と可能性があることをR.Nホームスティプログラムの実践は示し、それは教師にも学生にも、そして在外日本人にも大きな希望を与えるものと思う。